

山の彼方の空遠く

奨励	雨谷 昭弘【あめたに・あきひろ】
奨励者紹介	同志社大理工学部教授
研究テーマ	水道・鉄道等ライフライン電力設備の研究

あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。

(申命記 7章6-7節)

あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒野の旅を思い起こさない。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。

(申命記 8章2-3節)

(一) 言・葉

「山のあなたの空遠く・・・」カール・ブッセの有名な詩ですが、彼は何を捜しに行ったのでしょうか。日本語訳(上田敏(びん))が素晴らしいと思います。詩は世界共通に言葉の魅力そのものです。日本では言の葉と呼び、一つ一つの言葉が木の葉のように宙を舞い、人の心を捉えようとできていました。結果としてある人が発した(あるいは書いた)言葉は、その人のももとの意図や意味を超えて他者に多大なインパクトを与えることがあります。例えば阪神淡路大震災のなかで生まれた「しあわせ運べるように」という歌は、作者の想いをはるかに超えて福島へ、日本中へと広がっています。これを「始めに言葉ありき」と私は捉えています。その言葉には神が宿っているとも言えます。一方、聖書(やコーラン)のなかでは「始めに言葉ありき」は神の言葉ですが、ソドムやゴモラの後、神が人びとにそれぞれ異なる言葉を与えたことで、人びとは異なる文化をもち、異なる価値観や理想の故に争うようになったようです。

(二) 敵を知らず

水や食糧、そして土地や国を得るために争う。言葉が異なれば争いは更に激しくなる。争いは人間の本質的なもの、本能のようなものでしょうか。我が国でも古くから高い評価を得ている孫子の兵法「彼を知り己を知れば百戦して殆(あや)うからず」。しかし、現代の紛争や戦争は敵を知ろうとしない、あるいは認めないことから始まっているように思えます。更に悪いことに己を知ろうとしない。1960年安保の後の自己疎外という言の葉を最近目にするともなくなったのは、自己疎外されてしまったのではないかと恐ろしくなります。

(三) 己を知らず

世界の若者を席巻したビートルズ、安保の後の日本の若者も同じでした。そして、1963年11月23日深夜、ケネディー大統領暗殺のニュースがラジオの深夜放送でビートルズの曲を背景に飛び込んできました。米国は自ら疎外する道を歩き始めたようです。人種差別はキング牧師の暗殺に至り、敵を知り己を知らぬ憎悪が米国の精神を蝕んでいったようです。我が国でも、第二次世界大戦前の治安維持法が復活しそうな雰囲気です。やがて特高、即ち秘密警察が国民の権利を第二義的なものへと変化させ、国家権力者の権力を維持する国へと変容する流れが生まれつつあるように思われます。「国民は自分以上の政府をもてない」ということになるのでしょうか。

(四) 国民は自分以上の

政府をもてない

世界で唯一、米国との戦争に勝った国は?という世界的に有名なクイズがあります。この国は1000年以上にわたり、陸続きの大国からの侵略そして支配、13世紀の蒙古来襲、近代以降はフランスの植民地支配、日本軍の進駐、1954年フランス軍への勝利も束の間、米国との戦争、遂に1975年4月サイゴンを陥落させ、南北統一を為し遂げた国。共産党一党独裁ではあるが、1986年には実質的な経済自由化を実施し、祖国統一・独立の指導者Ho Chi Minhの「独立と自由」の後半へと移行しつつあります。ただし、「独立と自由」ではあっても決して「自由と独立」ではありません。また、1000年以上の他国からの侵略・支配に耐えて民族と国家を守ってきたなかでの「過去に囚われては明日がない」の姿勢は国家の政策、そして一人ひとりのベトナム人の日々に見ることが出来ます。ベトナム戦争中の親中政策、戦争勝利後のロシアとの友好関係、そして最近の米国との友好という実態が如実にこのことを物語っています。「国民は自分以上の政府も、自分以下の政府も持てない」(近藤純一『サイゴンから来た妻と娘』文春文庫 1981年)と言えます。なお、0. Stoneの映画「天と地」(新潮文庫 1993年)は個人としてのベトナム女性の戦争体験を通して、世界の人びとへ語りかけています。

縁があって、この1年で3度ベトナムを訪れました。そのなかで、人びとが自然と共生している国だと強く印象づけられました。特にメコンデルタは二毛作、三毛作。稲田の間に果樹園そして養蜂。淡水と海水の混ざるメコン河は魚の宝庫。自然の神に感謝し、仏教と共にあり、家族全員で農業、漁業を行っています。メコンデルタでは水位が上がっても洪水にならない(神の思召)との話でした。ベトナム戦争中、猿やネズミを使った米軍基地爆破、大量の毒蛇や蚊による基地攻撃も自然との共生の産物とのこと。また、最近の経済発展のなかで、大規模マンション、ショッピングセンター、道路等の建設により破壊される自然と人びとの関係に対する批判。「幸せ」とは何か。冷蔵庫があることで冷凍食品が大量に生産され、魚も野菜も保存可能になることは幸せではない。なぜならそのような文明化社会では今日収穫した新鮮な野菜や魚、肉を食べられないから。壁に囲まれたマンションの一室でテレビを見ながらの食事は不幸なこと、ベトナムで壁は支配者と同様の意味です。大半の人びとが路上のテーブルと丸椅子で共に食事を取ることで、人びとの対話、関係性が維持され、新鮮な食材が回転する市場が成立し、不要なゴミとして捨てられる食材が無い生活様式。これを非文明的とする先進世界の哲学、価値観は正しいのでしょうか。道路、鉄道、水道、電気等のライフラインが整備されていない低開発国、発展途上国の人びとは不幸なののでしょうか。

(五) 幸せ

敵を知らず、己を知らず、他日雄飛する策もなく、How to的な幸せの入手策が溢れている国。幸せ=金となりつつあるような現代社会。錬金術の世界。正しい錬金術は、例えば「Go where no one else will go, do what no one else will do」(Mary Lyon, Mount Holyoke Seminary創立者、新潟県や内村鑑三が訪問)、あるいはパウロ・コエーリョの『アルケミスト—夢を旅した少年』(角川文庫)を読んでください。また、メーテルリンクが言うように、幸せ(の女神)たちはたいいごく善良ではあるが、なかには最も大きな「不幸」より、もっと危険で不誠実なものもいると、知るべきかもしれません。

(六) ローマ文化

このような現代世界の流れはローマ帝国の文化かも知れません。ローマ帝国の建国、発展に大きく寄与したのが、古代エジプトに端を発する科学技術かと思われます。ナイルを治める者は国を治めるの言葉通りに、ナイル河治水のためにアルキメデスの幾何学、プトレマイオスの天文学、また地理学等が発展し、これらを継承したギリシャではコンピューターの原型と言える天体シミュレーター「アンティキティラ」が作られています。これらの技術をさらに発展させ、道路、橋、水道、都市建築等のインフラ技術がローマでは高度に発展しました。歩道と現在の鉄道の原型となる馬車道を併せもつ道路。馬車用車輪と車軸は規格化されており、ローマ支配下のどの国(駅)でも部品が調達できる体制、制度が整えられました。これにより大量の兵士と食糧の輸送が可能となり、ローマに敵なし、そして「全ての道はローマに通ず」かつ「ローマ人にあらずば人にあらず」となった次第です。ローマへの道は征服・支配した国の富をローマへ運ぶために使われました。征服した地域には小ローマが多数建設されました。これらの技術文明とその背景にある文化が現在の欧州、北米等の先進国の文明・文化の源であり、ローマが古代キリスト教を取り込むことで、西欧文明とその文化=キリスト教が形づくられたようです。この過程でキリスト教の内容は変化し、更に15世紀以降の欧州各国の植民地支配の文化的武器として利用されるなかでさらに大きく変容したと考えられます。

(七) 宗教

キリスト教の原型であるユダヤ教=旧約聖書から生まれたもう一つの宗教であるイスラム教、とキリスト教の間にこの1000年間で何と大きな隔りが生じたことでしょうか。「右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」(マタイによる福音書5章39節より)「目には目を、(中略)歯には歯を」(井筒俊彦『コーラン上』五、食卓—メディナ啓示—49節 岩波文庫 1957年)、「目には目、歯には歯。」(出エジプト記 21章24節より) アダムとイヴに人間の原罪を見ようとするキリスト教と、アダムは神の代理、即ち、人間は神の代理となり得るべきと考えるイスラム教の大きなギャップは何でしょうか。

もちろん、釈迦はヒンドゥー教の神々の一人にすぎないことに見られるヒンドゥー教と仏教のギャップも大ですが、いずれもサンスクリット文化の延長線上にあります。

偉大なる宇宙創造の神にすれば、地球に遣わした使徒の長男が釈迦で2600歳、二男がキリスト2000歳、末子が暴れん坊のモハンムド1400歳ということに過ぎないのかもしれない。

(八) ケルト文化

ローマ帝国の北限がライン河あたりですが、これはいわゆるケルト人の地。ケルト語とケルト文化、どちらかと言えば争いを好まず、国家の枠を好まず、あるがままに自然と調和して生きる傾向が強かったようです。しかし、支配すべく攻めてくる敵には敢然と立ち向かい、その強さに遂にローマは征服をあきらめ、ここにローマ帝国の北の境界が引かれたわけです。ローマ人にとって、ローマ文化にとってその向こうには未開の地、暗黒の森、野蛮人の地となりました。この意識（価値観）は欧米の数多くの本に見られるかと思います。

ローマ文化は技術文明を積極的に利用し、世界を征服し、人びとを暗黒から解き放ち、技術の恩恵を享受する現代先進社会の基礎となりました。一方、ケルト語は、現在ではアイルランドとフランスの極く一部でのみ使われる死語となりつつあります。しかし、ケルト文化は北欧に根強く残り、必要な範囲内でのみ自然の恵みを受け、生きる糧とし、できる限り自然と調和することを生きる姿勢の根本としているようにみえます。環境調和、自然保護、人権尊重等が北欧4カ国の基本政策の背景です。南太平洋の人びとの生き方を示している『パラギー—はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』（岡崎照男訳 立風書房 1981年）の話とも共通しています。また、バトナムの自然と人びとの共生もこれに類似しています。

「アバター」という映画はローマ文化とケルト文化の衝突、地球人の他の星への侵略、あるいはバトナム戦争での米国の最新兵器による攻撃と、自然との共生そのものを武器とした反撃を描いています。ルカによる福音書にもあるように「実に、神の国はあなた方の間にある」そのものがケルト文化であり、未開と称される東南アジア圏の文化かとも思えます。ローマ文化を支柱とする国々とそこに住む人びとが「神の国はそこにある」ことを忘れてしまったことに対する神の警告かとも思えます。

(九) 山の彼方

「山のあなたの空遠く『幸（さいわい）』住むと人のいふ。噫（ああ）、われひと尋（と）めゆきて、涙さしくみ、かへりきぬ。」（上田敏訳『海潮音』本郷書院 1905年）というカール・ブッセの詩もまた神の国がそこにあることを忘れてしまった人へのメッセージとも読むことができ、また幸せを外へ求めようとした自らへの戒めとも理解できます。「実に、神の国はあなた方の心のなかにあるのです。山の彼方の空遠くにではなく」。幸せもまた同じではないでしょうか。

2014年1月15日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録